The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ダイクシス対象の知覚像と非現場的要素の介入
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57330
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ダイクシス対象の知覚像と非現場的要素の介入

瀧田恵巳

1. 問題提起

金水・木村・田窪(1989:1)は，日本語学習者向けに「現場指示」[1]を次のように説明する。即ち「現場指示」とは，「今という時間，そして話し手の今いる場所を中心として，物事を指し示す働きをする」指示詞によって，「話し手・聞き手が見たり触ったりできる『現場』の対象を指し示す」ことである。この規定は明確で，一見，「談話や文章によって持ち出された『文脈』上の対象を指し示す」「文脈指示」等とは容易に区別されるように思われる。しかし Brugmann(1904:14)は，上記の「現場指示」と「文脈指示」に該当する事例間の相違が時に不明瞭であると指摘する。まず現場で指し示される対象が会話の間に知覚可能な形で現存するのであれば，例(1)の「この男」のように発話時を超えて存在するか，例(2)の dér が指す会話中に鳴り響いた雷のように，発話時には存在しないかのいずれかである。

(1) Dieser Mann hier ist mein Freund. (Brugmann 1904:14)[2]
ここにいるこの男は私の友人だ。

(2) Dér ist kräftig. (ibid.:14)
（会話中に雷が鳴っている際に）これはすごい。

例(2)の雷を鳴り終った直後に回想する例(3)の場合，この記憶像には聴覚的な余韻が残る。またワイングラスを口から離しつつ，つい今しがた飲み干したワインを指して述べられる例(4)の感想には，味覚をはじめとする知覚情報が生々しく残っている。

(3) Dás war kräftig. (ibid.:14)
これはすごかった。

(4) Dieser Wein war recht sauer. (ibid.:14)
このワインは本当に酸っぱかった。

知覚像と記憶像が混在する事例は，過去を表す時制のみではない。例(5)の dieses Lied は，発話時に聞き終えた歌を指し，記憶像が関わる。

---

[1] ここでいう「現場指示」は，2 で説明する「現場ダイクシス」に該当する。またタイトルにある「ダイクシス対象」は，Origo を起点とし定位づけるダイクシスの過程において指し示される対象である。
[2] 各引用の末尾には，出典（引用文献の場合は略号）と引用箇所のページ数を括弧付けで記載した。日本語訳は，(1)~(5)までは筆者が加え，(8)以降は訳本から引用し，同様に引用箇所のページ数を記載した。

(5)　Dieses Lied ist mir neu.　(ibid.:14)
（ある歌を聞き終わった後に）この歌は初めてです。

Brugmann(1904:14)によると，例(5)の段階では，言及した内容を指して Dies ist mir neu.「これは初めて聞きます」と述べる文脈照応とほとんど区別がつかない。いずれにせよ，例(2)~(5)では，発話現場で知覚される対象が指し示されると同時に，その知覚像には記憶像が介入するのは確かである。

しかし，こうした知覚像に介入するのは，知覚体験という記憶像にとどまらない。

日本語では，しばしば医者に対して患者が自分の体の一部を聞き手の領域を示す「そこ」という指示詞を用いて指し示す。その体の位置は，本来，話し手である患者の領域のはずである。金水・田窪(1992:132)によると，この用法には，指し示す対象を聞き手である医者に委ね，医者の領域と見なすという認識が働いている。

(6) 医院で：
医者：（患者の腹部を押さえながら）ここ，痛みますか。
患者：そこは，それほどでもありません。　（金水・田窪 1992:132）

指し示す対象の位置そのものは変わらないにも関わらず，話し手の経験により指示詞が変わるケースもある。金水・田窪(1992:132）によると，夫が，二メートルくらい離れたところから，子供を抱いている自分の妻に話しかける場合，指示対象が二人の子どもであれば「この」しか用いられず，夫の知らない子であれば「その」が優先される。

(7) {この/その}子，おまえによく似ているね。（金水・田窪 1992:132）

こうした対象には，記憶像や話し手の経験など様々な非現場的要素が介入している。この介入は，対象がものや位置のように静的な場合だけでなく，方向のように出来事に関わる動的な場合にも，様々な形で見られる。

本論文では，現代ドイツ語の物語 Die unendliche Geschichte『はてしない物語』の会話文におけるダイクシス的方向表現が発話現場で話し手及び聞き手が視覚上知覚可能な空間的方向を表す事例を取り上げ，その知覚像に介入する非現場的要素を分析する。対象語彙は，主要且つ第一義的な意味として「話し手もしくは話し手に準じる者（以下下線部を「話者」と呼ぶ）へ向かう方向」とされる her と，「話者から離れ，ある目標へ向かう方向」とされる hin を第一の構成要素とし，上下内外の方向を表す語を第二の構成要素とする二重不変化詞 Doppelpartikel である（以後これらの語彙を her-, hin-と記述する）[3]。

本論文で扱う現場指示と非現場的要素は，現場や想定，文脈等の指示場による分類（指

[3] her-と hin-の用例には her と hin の原義に矛盾する事例もあるが，本論文では矛盾しない例のみを扱う。

示の様式）に関わる。さらにこの課題は，言葉から世界への関与という，ダイクシスよりもさらに広いレフェレンスの観点からも論じられる。従って，まず 2 でこの二つの観点から本論文の課題を位置づけた後，3 で物語の用例を挙げ，4 でその要因を分析する。さらに本論文には一つ留意すべき点がある。それは，現場指示を物語という想像の産物に基づいて論じていることである。竜や頭に果物を実らせる女性は，実際にはまず存在しない。だが物語を読む我々は，会話当事者が会話文で描かれる情景をその場で見聞きしているものと見なす。その要因について，5 の結論と今後の課題を提示する際に考察する。

2. 研究対象の理論上の位置づけ

2.1. 指示の様式（モード）

Diewald(1991:110ff.)によると,「指示の様式（モード）Zeigmodus」は,「指示場 Zeigfeld」により,「現場ダイクシス Resldeixis」、「想定上のダイクシス Deixis am Phantasma」、「テクスト照応 Textphorik」、「テクストダイクシス Textdeixis」の四つに分けられる。

上記四つの下位分類は，ダイクシスと照応に大別される。その違いは，前者が指示場とその中心（「Origo 原点」）を必要とするのに対し，後者にはそれが必要ないという点にある。つまり「テクスト照応」はテクスト内部での方向関係で，Origo 及び発話場面に依存しない点で，他の三つのダイクシスとは厳に区別される。さらに現場及び想定のダイクシスは，テクスト照応との比較により,「方向関係は言語外のコンテクストに向けられ，現場ないし想定上の Origo を出発点に現場及び想定上のダイクシス対象（ダイクシス過程において指し示される対象）を指示する」(ibid.117)と定義づけられる。

三つのダイクシスのうち「現場ダイクシス」は，いわゆる現場指示に相当し，その指示場は発話の言語外の場面である。また時間・空間・人称等において最も豊かな言語表現手段を有し, 他の指示場の源となる, 優性かつ無標の指示様式である。「想定上のダイクシス」は、「現場ダイクシス」と全く同じ心理学的前提に基づくが，コンテクストが想像されるという点でのみ区別される。従って，この指示場の Origo は，想定上のものである。「テクストダイクシス」は，テクストを指示場とし，そこに置かれた Origo を起点に遠近関係が成立する。これはテクスト照応とダイクシスの特徴を併せ持つ最も複雑な指示様式である。

本論文で取り扱う事例は，発話現場に Origo が認められるという点で，現場ダイクシスと見なされるが，同時に様々な表象や観念が介入することから,「現場ダイクシス」と「想定上のダイクシス」に関わる。両者の区別は，本来 Bühler(1934 /1982)に由来する。それによると, 現場ダイクシスに相当する「明視的なダイクシス demonstratio ad oculos」は，人差し指のような自然な指示手段が別の指示手段に置き換えられたもので(Bühler 1934 /1982:80),例えば，狩りに行った A と B の間で，A が B に獲物を指し示す，或いははぐれた相手に自分の位置を知らせるのに hier と答える事例(ibid.105)が該当する。このダイクシスは「想定上のダイクシス」の原型とされ(ibid.102f.),「想定上のダイクシス」は,「主観的な定位 die subjektive Orientierung」の出発点としての Origo が記憶や想像上の

空間に移し替えられ,そこで構築された想像上の指示場において行われる定位付けである。

Diewald(1991)と Bühler(1934/1982)は共に，現場を指示場とし Origo を起点に定位づけるダイクシス（下線部を本論文では以後総称として Diewald(1991)の名称「現場ダイクシス」と呼ぶ）を他のダイクシスの基盤と見なすが，奇妙なことに，現場ダイクシスの名称には大きなずれがあり，その特徴は，それ自体というより，むしろ照応や想定上のダイクシスとの比較によって初めて明確に記述されている。

2.2. レフェレンス

Jackendoff(2002)は，レフェレンスの理論として，次の二つの見解を提示する。

(8A) Common sense realist theory of reference:

Phrase P of language L, uttered in context C, refers to entity E in the world (or possible worlds). (Jackendoff 2002:304)

指示の常識的実在主義理論

文脈 C で発せられた，言語 L の句 P は世界（あるいは可能世界）の中の存在物 E を指す。(357)

(8B) Conceptualist theory of reference:

A speaker S of language L judges phrase P, uttered in context C, to refer to entity E in [the world as conceptualized by S]. (Jackendoff 2002:304)

指示の概念主義理論

言語 L の話し手 S は，文脈 C で発せられた句 P を，[S によって概念化された世界]の中の存在物 E を指すと判断する。(357-358)

Jackendoff (2002:303, 日本語訳 357)によると，(8A)はレフェレンスの常識的な見解であるが,「世界の中の事物」という概念自体に問題がある。例えば，シャーロック・ホームズは空想上の登場人物であるにも関わらず，イギリス人であることは真であり，ルーマニア人であることは偽といえる。逆に地理上存在するはずのニューヨークとボストンの間の距離には，絶対的な真理はなく，測定の目的によってさまざまな形をとりうる。こうした理由により,「世界の中の事物」という概念を捨て,「世界」を言語使用者の心の中に押しこみ，言語と並べて考える(8B)の見解が提示される。

(8B)の見解は，本論文が扱う現象に合致する。つまり現場にあると思われていたダイクシス対象が，元来外界ではなく概念世界に存在するならば，その知覚像にも非現場的要素は必然的に介入する。この点に留意しつつ，以下，物語の用例を検討する。

3. 具体的事例の検証

ここでは，ダイクシス対象となる方向が，発話現場において話し手によって知覚され，話し手を Origo「原点」として定位づけられる例を取り扱う。

まず, その方向へ向かう出来事が話者によって明らかに知覚されている事例を提示する。次の例の heraus「ある領域内からこちらの外へ」は，話し手バスチアンの眼前で砂の粒（Sandkorn）と思っていたものの中から小さな炎が噴き出す方向を表している。

(9) Während er noch überlegte, was Mondenkind wohl von ihm erwartete, fühlte er plötzlich ein zartes Kribbeln auf seiner Hand. Er sah genauer hin.
»Schau mal, Mondenkind!« flüsterte er, »es fängt ja an zu glimmen und zu glitzern! Und da – siehst du's – da züngelt eine winzige Flamme heraus – . Nein, das ist ja ein Keim! Mondenkind, das ist ja gar kein Sandkorn! Das ist ein leuchtendes Samenkörnchen, das zu treiben anfängt!« (UG:195)
月の子がいったい何を自分に期待しているのだろうと考えていると，不意に掌が少しくすぐったくなった。バスチアンは目をこらして見た。
「あっ，見てください，月の子！」かれはささやいた。「何か，ちょっと光ってきた。チカチカって―ほら，見えるでしょ。―あ，炎があがった。小さい炎だ。おや？これは種子だ！月の子，これ，砂の粒なんかじゃないよ！光る小さな種子だ。それが芽をふきはじめたんですよ！」(275)

この heraus が表す方向は，出来事によってのみ，知覚されるわけではない。話し手と砂の粒の関係が成立していれば，その領域内から話し手のいる外の領域への方向は明確に定位づけられる。つまり方向とは，元来それ自体を取り出すことはできないが，知覚可能なものに依存して知覚することができるものである。

従って出来事が未然であっても方向は知覚される。例(10)の hinein が表す「憂いの沼 die Sümpfe der Traurigkeit」という領域内への方向は，話し手であるアルタクスという馬によって発話時に知覚されているが，行為はその場で要請されるが故に未然である。

(10) Eines Morgens, in dessem trüben Zwielicht alle Zeit stehengeblieben zu sein schien, erblickte er schließlich von einem Hügel aus die Sümpfe der Traurigkeit.
[...]
Artax schnaubte leise vor Entsetzen.
»Sollen wir dort hinein, Herr?« –
»Ja«, antwortete Atréju, »wir müssen den Hornberg finden, der mitten in diesen Sümpfen liegt.«
(UG:55)

時が止まってしまったかと思えるほど陰鬱なうす暗いある朝, ついに小高い丘に立ったアトレーユの目に，憂いの沼が見えた。　（省略）
アルタクスが恐怖におののいて，ふうっと鼻を鳴らし，低い声でいった。
「あそこに入ってゆくのですか，ご主人さま？」
「そうだ。」アトレーユは答えた。「この沼地のまん中にあるという甲羅山を見つけなくちゃならないんだ。」(77-78)

知覚可能な方向は，完了した出来事にも関与する。例(10)の herein は話し手バスチアンのいるテントの中への方向を表し，発話時において知覚可能である。だが「入って来る hereinkommen」という動作は，話し手の知らぬ間に完了している。ここには，例(3)~(5)のような記憶像ではなく，推測という形で非現場的要素が介入している。

(11) Bastian stand auf und ging in sein Zelt. Er warf sich auf sein Lager.
»Nun hast du wahrhafte Größe erreicht«, sagte leise eine sanfte, verschleierte Stimme, […]
Bastian setzte sich auf. Es war Xayíde, die gesprochen hatte. Sie hockte in der dunkelsten Ecke des Zeltes.
»Du?« fragte Bastian, »wie bist du hereingekommen?«　(UG:346)
バスチアンは立ちあがり，テントに入った。そしてベッドに身を投げた。
「とうとうわが君さまは，まことの偉大さに到達なさいました。」やさしそうな，くぐもった声がそっといった。（省略）
バスチアンは身を起こした。サイーデだった。テントの暗い片隅にうずくまって，いったのだった。
「おまえ，どうして入ってきたのだ？」バスチアンは問いただした。(477)

話し手の目の前に存在するものが，ある方向への移動に由来すると想定される場合もある。次の例の二つの heraus はいずれもアイゥオーラおばさまの体内から果物が生えてくる方向を表すが，当該の果物は既に発話現場にあり，生えてくるという出来事は完了済みである。ただし非現場的要素は異なる。この出来事は heraus(2)を発話するバスチアンにとっては未経験の事実で，推定の域を出ないが，前者の heraus(1)を発話するアイゥオーラおばさまにとっては，知覚プロセスとは別次元の周知の事実としても思考されている。

(12)　»Wachsen die Früchte denn auf deinem Hut?« erkundigte sich Bastian verblüfft.
»Wieso Hut? «　Dame Aiuóla blickte ihn verständnislos an. Dann brach sie in lautes, herzliches Lachen aus. »Ach, du meinst wohl, das ist mein Hut, was ich

da auf dem Kopf habe? Aber nein, mein schöner Bub, das wächst doch alles aus mir heraus(1). So wie du Haare hast. Daran kannst du sehen, wie ich mich freue, daß du endlich da bist, darum blühe ich auf. Wenn ich traurig wäre, würde alles verwelken. Aber bitte, vergiß nicht zu essen!«

»Ich weiß nicht«, meinte Bastian verlegen, »man kann doch nicht etwas essen, was aus jemand heraus(2)kommt.« (UG:387)

「この果物，おばさまの帽子になるの？」バスチアンはびっくりしてたずねた。

「帽子ですって？」アイゥオーラおばさまは，きょとんとしてバスチアンを見た。それからたのしくてならないというように，大声で笑いだした。「ああ，そう，あなたったら，この頭の上にあるのが帽子だと思ったのね。そうじゃないのよ，ぼうや。これはみんなわたしから生えているの。ぼうやの髪の毛とおなじよ。ほら見てごらんなさい，やっとぼうやがきてくれたので，わたしうれしくって，花盛りになったでしょ。悲しいと，みんな枯れてしまうのよ。あら，食べるのを忘れちゃだめ。もっとおあがり！」

「だけど……」バスチアンは困っていた。「だれかから生えてくるものを食べるわけにはいかないと思うんだけど。」(532-533)

例(12)の heraus(1)と同様，話し手の経験や知識に基づいて思考される出来事は，他にも見受けられる。次の例(13)は，目の前で飛行しつつ眠る幸いの竜フッフールを見ながら行われる会話の例である。アトレーユの発話にある herunter は空中から何かを投げ落としてくる方向を表す。この方向そのものは話し手の眼前の空間で捉えられる一方，空中から何かを投げ落とす行為は回避すべき習慣的な行為で，実際には行われていない。

(13) »Geht Fuchur nicht schlafen?« fragte Bastian schließlich.

»Er schläft schon«, sagte Atréju leise.

»Im Fliegen?«

»Ja. Er hält sich nicht gern in Häusern auf, sogar wenn sie so groß sind wie Quérquobads Palast. Er fühlt sich beengt und eingeschlossen und versucht, sich so vorsichtig wie möglich zu bewegen, um nichts herunterzuwerfen oder umzustoßen. Er ist einfach zu groß. Darum schläft er meistens hoch in der Luft.« (UG:253-254)

「フッフールはねむらないのかい？」

「ねむるよ。」アトレーユはそっといった。

「翔びながら？」

「そうなんだ。家の中に入るのは好きじゃないんだよ。ケルコバートの邸ほど広くてもね。狭苦しくて閉じこめられた感じがするんだろ。何かをおとしたり突き

あてたりしないように，一所けんめい気をつけて動かなくちゃならないもの。大きすぎるんだよ。だから，たいてい高い空の上でねむるんだ。」(348)

知覚過程の別次元に属する知識・経験の介入は，完了，未然の出来事のみならず，進行中の出来事にも見られる。例(13)の hinüber「こちら側から向こう側へ」は発話現場であるファンタージエン国から境界を隔てた人間界への方向を表す。この方向は広範囲ではあるが，現に自分のいる国が関わる点で，知覚される方向と見なされる。一方，「向こうへひきずられていく hinübergezerrt werden」という出来事は，現に行なわれているとはいえ，現場で起こる個別の出来事ではなく，時を越えた真理として捉えられる。

(14) »Aber ist es denn wahr«, wollte Atréju wissen, »was Gmork, der Werwolf, über die vernichteten Geschöpfe Phantásiens sagte, daß sie zu Lügen in der Welt der Menschenkinder werden?«

»Ja, es ist wahr«, erwiderte die Kindliche Kaiserin, und ihre goldenen Augen wurden dunkel, »[...] Es gibt zwei Wege, die Grenze zwischen Phantásien und der Menschenwelt zu überschreiten, einen richtigen und einen falschen. Wenn die Wesen Phantásiens auf diese grausige Art hinübergezerrt werden, so ist es der falsche. Wenn aber Menschenkinder in unsere Welt kommen, so ist es der richtige. Alle, die bei uns waren, haben etwas erfahren, was sie nur hier erfahren konnten und was sie verändert zurückkehren ließ in ihre Welt. Sie waren sehend geworden, weil sie euch in eurer wahren Gestalt gesehen hatten. Darum konnten sie nun auch ihre eigene Welt und ihre Mitmenschen mit anderen Augen sehen. Wo sie vorher nur Alltäglichkeit gefunden hatten, entdeckten sie plötzlich Wunder und Geheimnisse. [...]« (UG:168)

「それにしても，人狼グモルクのいったことはほんとうなのでしょうか？虚無に呑まれて滅ぼされたファンタージエンの生きものが人間の世界にいって偽りになるということは。」アトレーユはそれが知りたかった。

「それはほんとうです。」そう答えた幼ごころの君の金色の目に，かげりがさした。「(省略) ファンタージエンと人間界の境を越える道は二つ，正しい道と誤った道とがあるのです。ファンタージエンの生きものが恐ろしい方法でむりやり向こうにひきずられてゆくのは，誤った道。けれども，人の子たちがわたしたちの世界にやってくるのは，それは正しい道なのです。ここにきた人の子たちはみなこの国でしかできない経験をして，それまでとはちがう人間になってもとの世界に帰ってゆきました。かれらはそなたたちのまことの姿を見たゆえに目を開かれ，自分の世界や同胞もそれまでとはちがった目で見るようになりました。以前には平凡でつまらないものとばかり見えていたところに突然驚きを見，神秘を感じるよ

うになりました。(省略)」(236)

以上のように her-と hin-が表す知覚可能な空間的方向には，要請，推測，個人的な経験や時空を超えた真理など，様々な非現場的要素が介入する。

4. 非現場的要素の要因と分類

本論文では，ダイクシス対象が知覚像として認識されながら，同時に非現場的要素が介入する事例を取り上げたが，ここではその要因を考察し，分類を試みておきたい。

まず非現場的要素が介入する要因の一つとして，該当する出来事が未然か完了しているため，その場で知覚できないことが考えられる。このような非現場的要素は出来事の知覚プロセスに直接関わるが，それとは別に，例(13)や(14)のように進行中の出来事についても，経験や知識が導入されることにより，習慣や一般論として記述されることもある。先に挙げた日本語の医者と患者の会話の例(6)は，医師に関する経験や知識に基づいた判断であり，例(7)の子供を指し示す例もまた，ある種の経験に基づく。以上取り上げた用例は，知覚プロセスに関わる出来事の進捗状況（「進行中/未然/完了」）と「(経験・知識・思考など知覚プロセスとは)別次元の非現場的要素の介入の有無」により次のように分類される。

	別次元の非現場的要素の介入無し	別次元の非現場的要素の介入有り
進行中	(1),(2),(9)	(6), (7),(14)
未然	(10)	(13)
完了	(3) ,(4), (5), (11), (12:heraus2)	(12:heraus1)

5. 結論と今後の課題

このようにダイクシス対象の知覚像には，様々な非現場的要素が介入する。そのうち典型的な現場ダイクシスと見なされるのは，例(1),(2),(9)のように出来事が進行中であり，別次元の経験・知識の介入が無いものであろう。同じ進行中の出来事であっても，それが時を超えて起こりうるという要素が関わる例(14)と比較すると，その差は歴然としている。

確かに例(1)は，目の前にいる男性の位置を「ここ hier」で，本人を「この dieser」で指し示すという典型的な現場ダイクシスであろう。だがその際，ダイクシス対象である男性とその位置を話者の領域と見なすのは，純粋な物理的距離ではなく，その認識・判断という非現場的要素である。このように典型的な現場ダイクシスもまた，いわゆる現場に存在する対象を直接指示するのではなく，知覚されたものとして概念世界に取り込まれた対象を指し示しているといえる。

そして物語の会話文に描かれる知覚像もまた，虚構で想定上の存在でありながら，その話し手が知覚したものと見なされる。それは，知覚像が元来概念世界に取り入れられた非現場的存在であるからに他ならない。知覚像に表象が付随するのではなく，概念世界に取

り込まれた知覚情報が現場以外の表象と融合して知覚像として認識されるのである。

一般に現実と想像は厳に区別されている。確かに我々は想像のみで生きているわけではなく，あらゆる現実の恩恵を受けている。その一方で，我々の日々の活動は，想像を実現する試みでもある。故に，言葉が表出する概念世界が言語使用者の心の中にあるとするJackendoff (2002)の見解には，まだ検討の余地がある。Bühler (1934 /1982:36)も指摘するように，言語現象そのものは現実の中にある。おそらく我々の言う「現実」と「想像」は遠いようで非常に近い。奇しくも本論文で扱った物語のテーマは，現実と想像の健全な交流こそが互いの世界を豊かにするというものであった。今後は，現実と想像の相互作用，言葉による世界への働きかけとしてのダイクシスをさらに追及してゆきたい。

謝辞

本論文は JSPS 科研費 253704300 の助成を受けたものです。また，引用文献 Die unendliche Geschichte『はてしない物語』の文例収集に際して多大なご助力を賜りました大阪大学非常勤講師の村上八重子先生に，心より御礼申し上げます。

[引用文献略号と出典]

UG= Ende, Michael: Die unendliche Geschichte, K. Thienemanns Verlag, Stuttgart, 1979.（上田真而子・佐藤真理子訳『はてしない物語』岩波書店 1982 年。）

[主要参考文献]

Brugmann, Karl **(1904)**: Die Demonstrativpronomen der indogermanischen Sprachen. Eine bedeutungsgeschichtliche Untersuchung. Abhandlungen der philologisch-historischen Klasse der Königl. Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften 22/6, Teubner, Leipzig

Bühler, Karl **(1934/82)**: Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934).（脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子・杉谷眞佐子共訳『言語理論　言語の叙述機能　上巻』クロノス 1983 年。）

Diewald, Gabriele Maria **(1991)**: Deixis und Textsorten im Deutschen (=Reihe Germanistische Linguistik 118), Niemeyer, Tübingen.

Jackendoff, Ray **(2002)**: Foundations of Language. Brain, Meaning, Grammar, Evolution, Oxford.（郡司隆男訳『言語の基盤　脳・意味・文法・進化』岩波書店 2006 年。）

金水敏・**田窪**行則**(1992)**:「談話管理理論から見た日本語の指示詞」，金水敏・田窪行則（編）『指示詞』，ひつじ書房，1992，123-149.

金水敏・**木村**英樹・**田窪**行則**(1989)**:『日本語文法　セルフマスターシリーズ 4　指示詞』，くろしお出版.